

高校在学中の「学びの転換」的経験が成長実感に与える影響

——高大接続プログラムの取り組みと追跡調査——

荻谷 千尋, 田中 千晶, 中野 正俊 (金沢大学)

金沢大学高大接続コア・センターでは、KUGS 特別入試の合格者を対象とした入学前意識調査と、入学後3年11か月を迎えた全在学学生への意識調査を実施している。本稿はこの二つの追跡調査の概要を示し、高校在学中の「学びの転換」的経験が高校生・大学生にもたらす成長実感を明らかにすることを目的とする。特に、金沢大学独自の「KUGS 高大接続プログラム」を受講した学生がどのような点で成長を実感するのか、またその実感が得られやすい条件を特定する。分析の結果、大学が提供するプログラムだけでなく、高校での探究学習経験も大学在籍時の特定の成長実感と関係することが示された。さらに、本研究の知見は、主体的に学ぼうとする意欲の重要性を指摘する先行研究とも整合し、高大接続の観点からもその意義が確認された。

キーワード：追跡調査, 高大接続, 学びの転換, 成長実感

1 はじめに

中央教育審議会は、1999年と2014年の二度、高大接続を主題に答申をまとめた。両答申ともに、高大接続改革は大学入試改革だけを指すわけではない点に留意している。だが、特に2014年答申が挙げる多くの具体策が大学入試改革であること(中央教育審議会, 2014, pp. 10-19)、そして、この答申と連動して文部科学省が、多面的・総合的評価への転換・充実を図るよう、国立大学に予算措置を講じたこともあり、高大接続改革は大学入試改革と同一視される傾向にある。両答申が、高校で身に付いた学力を前提に高大接続を構想した点にも留意すべきだろう¹⁾。高校は「学力の3要素」の「確実な育成」を、大学は「学力の3要素」の「更なる伸長」を担う、とされた(傍点は引用者)。また、2014年答申が学力問題に傾倒した結果、高校生、大学生が「自分は何者か」「自分は何者になりうるか」といったアイデンティティ形成期に当たることへの配慮が十分ではないという問題もある。

その結果、依然、高校と大学の接着面は入試が中心であり、その接着面も弱い。望ましい生徒像、学生像を共有するような相互のコミュニケーションをはかる恒常的な制度はない。研究と親和性があると考えられる探究学習においても相互連携は不十分である。中等教育と高等教育は接続することを前提に制度設計されていないことを踏まえれば、接続を模索する不断の努力が不可欠である。大学教育学を専門とする松下が、初年次教育を念頭にいち早く指摘したように、高大接続は高校での学びと大学での学びの連続性だけでなく、非連続性の自覚的な把握の上に「学びの転換」を促すプログラムを要する。「学びの転換」は「高校で学んできた事柄をいったんほどこき、そのある部分を使

いつつ、新たに継続したりしながら必要に合わせて再構築する」(松下, 2010: 11)ことを要するが、高校、大学ともにこのような認識は十分には浸透していない。また、進学の際の自己決定力、他者決定力の強弱がいかに大学生活を左右するかといったアイデンティティにかかわる知見も参照されるべきだろう(山田, 2011)。

これらの高大接続にかかわる知見は、大学側から高校生へのより積極的なアプローチが必要なことを示唆するが、それはどのような形でなされるべきなのか。本稿は、分析対象とする金沢大学 KUGS 高大接続プログラム(概略は後述)を、高校在学中に「学びの転換」を促すプログラムであり、かつ、アイデンティティ形成を促すプログラムと位置づける。本稿は本プログラムの追跡調査の概要を基軸としながら²⁾、このプログラムによる「学びの転換」、アイデンティティの形成について述べる。本稿を通して、大学が提供する育成プログラムによって、成長を実感しやすい対象や条件を検討したい。この知見は、一事例に基づくものであるが、大学を中心とする高大接続のあり方や、探究学習経験が大学の教育・研究活動に与える影響を考える上で示唆を提供する。特に、高大接続のあり方は大学によって多様であり、そのため研究として蓄積されにくい。本稿が提示する質問項目、分析手法、ならびに注目する説明変数は、結果の解釈や結論にかかわらず、高大接続に関わる追跡調査の一つのモデルとして位置づけられるだろう。

2 KUGS 高大接続プログラムの概要

金沢大学 KUGS 高大接続プログラムは「高校生等を対象として、金沢大学の学びを知り、金沢大学での

学びに必要な能力・資質及び意欲を育成することを目的とした教育プログラム³⁾であり、「選別ではなく育成のためのプログラム⁴⁾」である（修了生はKUGS 特別入試の出願資格を得られるが、それを目的とするプログラムではない）。

本プログラムの特徴は他大学のプログラムと比較するとわかりやすい。大学が高校生を対象に育成を掲げて実施する教育プログラムの多くは科学者育成のためのプログラムであり（金沢大学も「金沢大学 STELLA プログラム（シニアコース）」という名称で実施している）、その受け入れ枠は限られている。総合型選抜のために実施されるプログラムは単発開催が多く、プレゼンテーション、レポートなどの第一次選考を兼ねた選抜のための仕組みである（お茶の水女子大学新フンボルト入試が代表例である）。入試選抜を目的としない育成型の教育プログラムの代表例である桜美林大学の「ディスカバ！ 育成型」プログラムの修了の可否はレポート審査であり、比較的短期の取り組みである。KUGS 高大接続プログラムの修了認定もレポートによってなされる点は同じである。だが大きな相違点は、提出者全員に対して大学教員からレポートに関する助言的なコメントを受けることができる点、そして評価が「不合格」であっても再提出が可能な点にある（多くの者は初回提出時は不合格である。このことは、取り組みが比較的長期にわたることを含意する）。このように本プログラムには「選別ではなく育成」である仕組みが実装されているのである。

本プログラムにおいて課せられる 2 種のレポート（高校での学びの振り返りに関するレポートと、大学での学びに関するレポート）は、高校生活を振り返り、また大学での学びを知り、自分なりに課題を発見し解決策を考え、さらに、高校卒業後に取り組みたいことを具体的に考えるものである⁵⁾。受講生は高校生のうちから高校と大学の違いを知り、大学で求められる学習姿勢を身に付けることが促される。金沢大学が育成したいと考えるポリシー（金沢大学<グローバル>スタンダード（学士課程）。以下、KUGS）にしたがった 6 つの評価項目によって評価される。高大接続の観点から、すべての評価項目について大学生と同じ基準で評価される（高校生基準ではない）。例えば、評価項目 1（「自己の立ち位置を知る能力」）の執筆の際の目標は「自分の置かれている状況を正しくとらえ、自分が何をすべきかを自ら進んでつかみ取り、それをもとにレポートで課題（問題点）を設定できている」ことに置かれている。また、評価項目 5 と 6（「未来の課題に取り組む能力」、「新しい社会を生きる能力」）

では、「何のために大学に行くのか、何を学びたいのかを自分なりに考えて、具体的に何をしたいのかを明確にできている」ことが求められる。自己推薦書とは異なるフォーマット、評価基準を課すことで受講生は「学びの転換」を意識し、自分のアイデンティティを問い直す契機となる。金沢大学は、このようなプログラムを通して、高校生に KUGS を示し、振り返りや学びによって彼らの成長を促すことを企図する。

3 先行研究

このような特徴的な教育プログラムを実践しているがゆえに、学術的に信頼できる方法を用いて、その効果を体系的に検証する必要がある。しかし、大学が高校に対して長期間・広範囲にわたるプログラムを提供した例は少なく、追跡調査も公開されていない。そのため本節では、高大接続に限定せず、高等教育研究における近年の追跡調査についての研究動向を概観する。

本庄（2022）は、「全国大学生調査」をもとに、学習態度（主体的学習者と受動的学習者）による学習行動と学習成果の獲得状況の違いと学習態度の規定要因を解明することを目指し、主体的学習態度がプラスの影響を及ぼすことなどの知見を得る。早稲田大学を対象とする遠藤（2022）は卒業生に対して実施した意識調査を、学習行動の因子分析、入試区分別の学習行動得点の平均値、学部時代に身につけた能力といった観点で分析し、一般入試以外の入学者の学びの熱心さ、学習成果の一部が相対的に高いことを示す。大阪大学を対象とする井ノ上ほか（2022）は、「AO・推薦入試では、学問・研究に意欲を持ち、主体性をもって周囲と協働しながら学べる学生を本当に獲得できているのか」（*ibid.*, p. 60）を明らかにするもので、本稿の問題意識に近い。本調査は、入学時の学生の学問・研究に対する意欲に関する意識調査、学問・研究に対する意欲主体性等の評価にかかわる意識調査、卒業論文の指導教員を対象とする学生評価などにもとづく、包括的で、実証性の高い調査である。彼らは、AO・推薦入試は「手間はかかるが望ましい学生を獲得する手段として有効」とその論を結ぶ（*ibid.*, p. 61）。

以上の先行研究を踏まえ、本研究は、主体性や学問、研究に対する意欲に着目する。加えて本稿は、高大接続の観点から、高校での学習経験や入学目的なども分析に取り入れる。

4 KUGS 特別入試合格者入学前意識調査

KUGS 特別入試合格者入学前意識調査は、KUGS

特別入試を受験し合格した者を対象に、毎年2月末から3月末に実施している（回答はインターネットによる。なお、本プログラムを受講したが修了しなかった者、KUGS特別入試を受験しなかった者、受験したが不合格だった者にはアンケートを実施していない。一方でプログラム修了以外の方法でKUGS特別入試の受験資格を得た者（例えば、金沢大学STELLAプログラムシニアコースのCステージを修了した者）は調査対象に含まれる）。その目的は、KUGS特別入試合格者の属性、経験、意識、認識を全般的に調査するもので、質問項目の大きな柱は、①KUGS高大接続プログラムの利用実態や理解度に関する質問群と、②同プログラムを通じた成長の自己認識（成長実感）に関する質問群からなる。例年、1.単純集計を行い、2.主要なカテゴリ変数に着目したクロス集計を行う。3.特徴的な結果が確認された項目については検定を行い、4.相関行列（ヒートマップ）を作成したうえで、5.重回帰分析により分析モデルを構築している。なお無回答は集計から除外している。

次項では、紙幅の都合上、これらの分析のうち単純集計とクロス集計に関する特徴的な傾向を示す（本稿の目的に照らして、STELLAプログラムシニアコースのCステージを修了した者など、KUGS高大接続プログラム以外の方法で、KUGS特別入試の受験資格を得て合格した者は、分析対象から除外している。また実施体制の都合上、2024年度は回答率が低かったため、本調査の比較対象は2023年度と2025年度調査とする⁶⁾。ここで着目する変数は、成長実感に直接関わるものに限らず、出身高校の所在地、高校時代に特に力を入れた活動、KUGS特別入試を知った経路、出願理由など多様である。これらは成長実感に直接・間接に影響しうるため、交絡要因として考慮する必要があるからである。特に、北陸3県出身者とそれ以外では、高校時代の取り組みや出願理由の傾向に差異がある。地域差による見かけ上の相関を避けるため、県別分析も重視する（次節の分析も同様）。

4.1 主な知見①：属性に関する変数の年度間の比較

意識調査の属性に関わる傾向が、単年度に限った一過性のものなのか、それとも継続的に観察できる傾向なのかを確認するために、2023年度と2025年度調査の比較結果を示す。特に、探究学習が必修化された2025年度とそれ以前では、意欲的な活動や出願理由に異なる傾向が生じる可能性に留意する。

2023年度調査では女子生徒の回答率が高かったが、2025年度調査の男女比はほぼ均等だった。回答者の

出身高校の所在地を、北陸3県とその他の都道府県で分類したところ、北陸3県が61.3%、それ以外の都道府県が38.7%だった（2023年度調査と同傾向）。一般選抜の受験予定大学として金沢大学を挙げた者（併願者）はやや減少した（2025年度55.5%、2023年度62.4%）。高校生活で特に意欲的に取り組んだ活動として部活動を選択した者がやや増加し、探究活動を挙げた者がやや減少した（部活動：2025年度48.9%、2023年度42.8%；探究活動：2025年度28.1%、2023年度31.2%）。KUGS特別入試に出願した理由（複数選択可）に「主体的な学びが評価されるから」を選んだ者が増加した（2025年度33.0%、2023年度25.0%）。高校教員によるレポート添削経験の回答分布は、両調査で同傾向だった。

2023年度調査では、回答者の出身高校（北陸3県とその他の都道府県）で、意欲的に取り組んだ活動の選択肢として探究活動を選択する割合はほぼ同数だったが（北陸3県31.3%；その他32.6%）、2025年度調査では、北陸3県の探究学習選択者が23.1%と減少した（その他は33.3%でほぼ変化なし）。特別入試の出願理由として「主体的な学びが評価されるから」を挙げた割合も変化した（2023年度：北陸3県20.9% その他31.1%；2025年度北陸3県23.8% その他43.1%）。KUGS特別入試が全国に浸透する中で、探究学習に熱心に取り組んだ者、主体的な学びを重視する受験者層に継続的に訴求していることがわかる。

4.2 主な知見②：成長実感に関する回答

受講生はKUGS高大接続プログラムを通してどのような成長実感を得ているのか。設問では「何を学んだのかを振り返る力が身についた」（振り返る力）、「将来の目標を見つけ、それに向かって努力する力が身についた」（将来の目標）、「考えを表現する力が身についた」（表現力）、「他者と協働することへの意識が高まった」（協働意欲）、「社会的課題を解決することへの関心が高まった」（課題解決志向）の5つの観点について5件法で回答を求めた。ここでは、現状および今後の動向を反映していると考えられる2025年度調査を中心に紹介し、2023年度分については、傾向の継続性を確認するために補足的に言及する。

図1は2025年度の調査結果を単純集計したものである。ほとんどの回答者が「強くそう思う」もしくは「そう思う」を選んだ⁷⁾。2023年度調査においても、多くの回答者が肯定的な自己評価を下しているが、「振り返る力」および「将来の目標」の観点で「強くそう思う」を選んだ者の割合は、それぞれ41.9%、36.6%

であり、2025 年度調査よりも高かった。

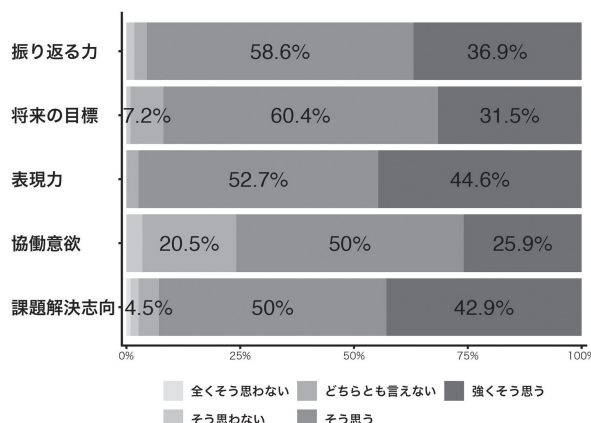


図 1 KUGS 高大接続プログラムによる成長実感 (2025 年度 入学前意識調査)

性別でクロス集計したところ、「振り返る力」「将来の目標」の観点については、女子生徒の方が「強くそう思う」という回答比率がやや高かった（振り返る力：女子 43.9% 男子 30.2%；将来の目標：女子 38.6% 男子 24.5%）。2023 年度調査も概ね同傾向だが、男子の「表現力」のみ変化が見られた（2023 年度：35.5%；2025 年度：45.3%）。いずれも統計的な有意差は確認できなかった。北陸 3 県とそれ以外では、北陸 3 県以外の方が「振り返る力」、「協働意欲」の観点で「強くそう思う」の回答比率がやや高かった（2025 年度調査：振り返る力 北陸 3 県 28.4% その他 50.0%（有意差なし）；協働意欲 北陸 3 県 16.4% その他 40.0%、 $p = .012$ （フィッシャー正確確率検定、以下同じ）、2023 年度調査：振り返る力 北陸 3 県 45.5% その他 38.6%（有意差なし）；協働意欲 北陸 3 県 27.3% その他 22.7%（有意差なし））。

意欲的に取り組んだ活動として探究学習を選択した者とそれ以外で比較してみると、「将来の目標」（「強くそう思う」：探究学習 43.8%；探究学習以外 26.6%）と「課題解決志向」（「強くそう思う」：探究学習 62.5%；探究学習以外 35.0%）の観点において顕著な違いが見られた（図 2 を参照）。一方で「協働意欲」については探究学習以外を選択した者の方が「強くそう思う」という回答がやや多かった。いずれの項目においても統計的な有意差は認められなかった（2023 年度調査では、表現力についてのみ統計的に有意な差が認められた（ $p = .029$ ））。

KUGS 特別入試への出願理由（複数回答可）に「主体的な学びが評価されるから」を選択した者（33.0%）とそれ以外を比較する。図 3 が示すように、プログ

ラムを通じた成長にかかわる質問群において、「主体的な学びが評価されるから」選択者の方が、全般的に顕著に強く成長を実感していることがわかる（振り返る力 $p = .032$ ；将来の目標 $p = .010$ ；表現力 $p = .036$ ；社会的課題解決志向 $p = .007$ ；協働意欲は有意差なし）。2023 年度調査でも同様の傾向が見られた（振り返る力 $p = .046$ ；社会的課題解決志向 $p = .024$ ；これら以外の項目は有意差なし⁸⁾）。

以上のクロス集計結果および検定結果から、KUGS 高大接続プログラムを通じた成長実感という被説明変数に対して、性別、出身地といった変数は大きな影響を与えておらず、出願理由あるいは高校生活における熱心な取り組みの種類といった変数との相関が見られることがわかった。特に出願理由については多くの項目で有意差が見られ、かつ、過年度調査とも整合している。いずれも、先行研究が示唆するように「主体的な学習態度」と強くかかわる変数である。プログラムの受講前と受講後のデータを取得しそれを比較しているわけではないため、KUGS 高大接続プログラムの教育効果を厳格に特定できていないわけではないが（因果推論を目指した分析ではない）、少なくとも本調査から、同プログラムは「主体的な学習態度」を身に付けようとする者と親和性が高く、そのような者には成長を実感しやすいプログラムであると結論づけられる。

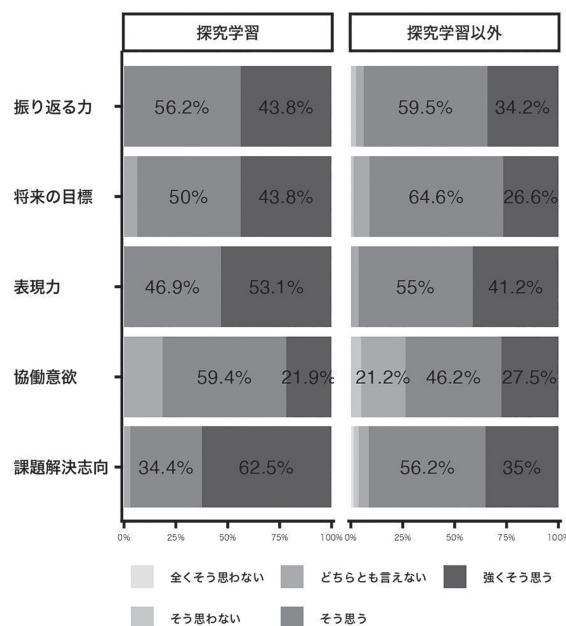


図 2 KUGS 高大接続プログラムによる成長実感（探究学習の経験の有無）

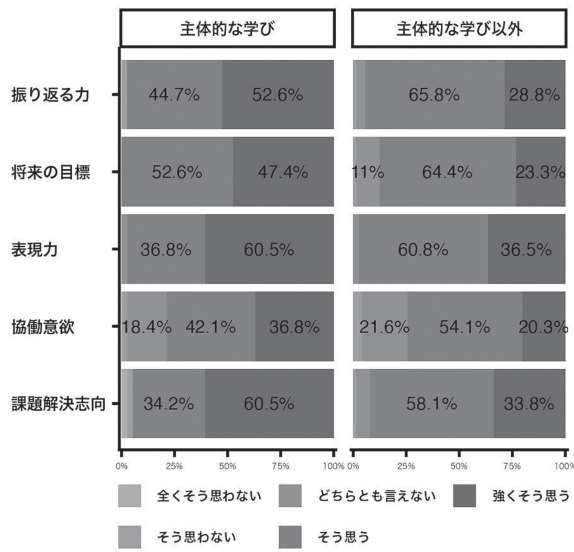


図3 KUGS 高大接続プログラムによる成長実感（出願理由として「主体的な学び」を選択の有無）

5 高大接続意識調査

高大接続意識調査は、大学入学後3年11か月が経過した学生（卒業予定の有無を問わない）を対象に、高校での学習経験ならびに大学入試での選抜方法と、金沢大学における学習経験や大学教育についての見解を尋ねるものである。特に、高校での学習経験、大学・学類選択の理由、KUGS 高大接続プログラムの利用の有無と入試方法が、大学における学びや成長とどのようにかかわっているのかを明らかにすることを目的とする。

昨今の高校生の学習経験の変化も、この調査によって明らかにしたい事柄のひとつである。探究学習の本格的な導入や、大学入試センター試験から大学入学共通テストへの変更など、近年、高校教育や大学入試は大きく変化している。探究学習では教科学習とは異なり、各高校の特色が顕著に現れる分、高校生の学習経験が多様化しており、大学入学時点ですでに研究への理解や関心に大きなばらつきが生じている可能性がある。こうした高校での探究学習の経験が、大学での専門分野選択や大学入学後の研究活動に影響を与える可能性は十分ありうると思われる。本調査のうち、大学選択や大学における成長認識などの質問項目はベネッセ教育総合研究所（2022）を参照し、多くはその文言をそのまま用いている。

本調査は2024年度が実施初年度にあたり、試行的性格をもつ。ここで示すデータは、2021年度金沢大学入学者（入学から3年と11か月を経過した者）を対象に、学域、学類、入試区分、卒業判定の有無、年

齢を問わず、学内のメッセージ機能を通して回答を依頼したアンケート結果である（回答はインターネットによる）。アンケート実施期間は2025年3月10日から3月31日まで、回答者数は26名（対象者数1,728人、回答率1.5%）だった。以下の分析は、1. 単純集計を行ったのち、2. 主要なカテゴリ変数（属性または意識変数）に着目してクロス集計を行った。無回答は集計から除外した。以下、主要な特徴を示す。

5.1 主な知見①：単純集計

「高校生活でもっとも意欲的に取り組んだ活動」に「探究学習」を挙げる者はいなかった（もっとも多い回答は履修科目の勉強、次いで部活動、生徒会活動だった）。探究学習に取り組んだ者は全体の65.4%、取り組んでいないと答えた者が15.4%、わからないと回答した者が19.2%だった。探究活動に取り組んだ者に限って高校での探究学習を通して身についた力を尋ねたところ、「課題を解決（解明）する」にもっともポジティブな反応を示した。「グループで協働する」、「自分たちでとったデータなどを整理する」については「かなり身についた」の回答比率が高かった。一方で、社会交流についての回答はそれほど高くなかった。これはコロナ禍や研究対象に起因する可能性を考慮すべきだろう。ここ数年の間に、高校と自治体や企業との連携が進み、探究学習の研究フィールドが広がっていることを考えると、この割合は今後大きく変化することが予想される。

進学先に金沢大学（学類）を選んだ理由（3つまで選択可）としてもっとも多く挙げられたのは「入試難易度が自分に合っていること」「興味のある学問分野があること」「経済的な負担が少ないこと」の3つだった。また「これまでの大学生活の中で、どのくらい力を入れてきましたか」に関する設問群においては、専攻分野の授業に次いで卒業研究に熱心に取り組んだという回答が多かった。「大学生活全体を通じて〔以下の項目が〕どの程度身についたと思いますか」という設問群に対して、ほとんどの者は「かなり身についた」「ある程度身についた」と回答している（図4参照）。「あまり身につかなかった」などのネガティブな回答は「自分で目標を設定し、計画的に行動する」、「既存の枠にとらわれず、新しい発想やアイデアを出す」「自ら先頭に立って行動し、グループをまとめる」、「国際的な視野を身につける」、「社会活動（ボランティア、NPO活動などを含む）に積極的に参加する」の項目だった。

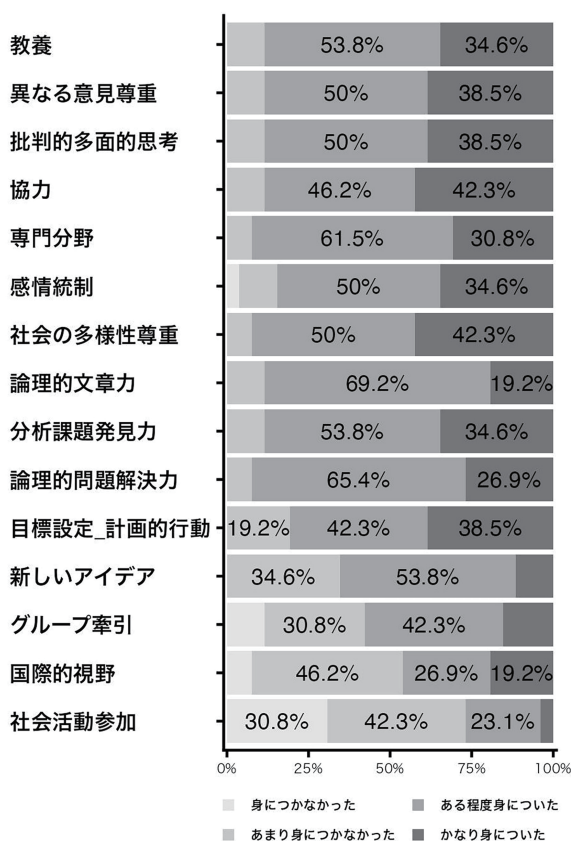


図 4 大学生生活を通じた成長実感

5.2 主な知見②：クロス集計

大学生生活全体を通じた成長に関する質問群を性別、出身地、出願理由、KUGS 高大接続プログラムの利用の有無、探究学習の経験によってクロス集計した結果を示す。性別による特徴的な相違は見られなかった。北陸 3 県以外の学生の方が全般的に各項目に対して「かなり身についた」と回答した。大学や学類を選んだ際に重視した項目に、入試難易度を挙げた者とそれを選ばなかった者に特徴的な違いは見られず、また、興味のある学問分野を挙げた者とそれを選ばなかった者にも特徴的な違いは見られなかった(前者の方が「かなり身についた」と回答する者がやや多い)。

KUGS 高大接続プログラムの利用者である KUGS 特別入試(回答数 5 名)とそれ以外の選抜方式(同 21 名)を比べたとき、KUGS 特別入試入学者は総じて「あまり身につかなかった」「身につかなかった」といったネガティブな回答が少ない(図 5 参照)。とりわけ「人と協力しながらものごとを進める」「自分で目標を設定し、計画的に行動する」については「かなり身についた」という回答比率が高かった。

探究活動の経験の有無で比較したとき、探究学習を行った者の方が、総じて「かなり身についた」と回答

している(探究活動の経験あり 17 名、なし 4 名、不明 5 名。図 6 参照。不明のデータは図には含めていない)。なお、探究活動経験者を対象に活動の熱心さを尋ねたところ「熱心に取り組まなかった」と答えた者は大学生生活の殆どの項目で成長を実感できていない(ただし N 数が 2 名と少ない点に注意が必要である)。

本調査から、大学生は多くの点で成長を実感しているものの、性別や出身地、出願理由よりも、探究学習経験や KUGS 高大接続プログラムの利用の有無が成長実感と強く関連していることがわかった。特に同プログラム利用者や KUGS 特別入試入学者では、「自分で目標を設定し計画的に行動する」という項目へのポジティブ回答率が高く、これは同プログラムが育成を目指す学生像と一致する。今年度調査は回答者数が少ないが、この結果は継続的調査の参照点となるだろう。なお、学域・学類の影響を考慮した分析が必要ではあるが、今回の有効回答数では統計的に信頼できる分析ができなかった。回収率の向上を図り、学域・学類を含めた分析を行いたい。

6 おわりに

本稿では、KUGS 高大接続プログラムによる「学びの転換」やアイデンティティ形成を通じて、受講生がどのように成長を実感しているかを確認した。プログラム利用や探究学習の経験は成長実感のすべてに一律に影響するわけではなく、他者との協力や将来の目標設定など、行動のプロセスに密接に関わる項目で顕著な差が見られた。本研究はこうした質的差異を把握するため、「強くそう思う」「とても身についた」などの強い反応に注目して分析したが、「そう思う」「身についた」など、相対的に弱い反応を含めて再集計しても肯定的傾向は維持され、結論は変わらない。これらの知見は、主体的に学ぼうとする意欲が成長にとって重要であることを指摘する先行研究とも整合しており、高大接続の観点からもその意義が確認された。

また、分析の都合上、探究学習の経験と KUGS 高大接続プログラムの利用は分けて集計しているが、両者は排他的ではない。探究学習に熱心な者ほどプログラムの効果が高く、大学入学後も成長を実感しやすい可能性がある。また、多くの大学では「学びの転換」を初年次教育で行うが、本研究は、高校在学中という早期段階でも生徒がその目標に近づくことが可能であることを示唆している。

一方、金沢大学の特別プログラムでなくとも、探究学習への意欲や経験が部分的に「学びの転換」を促し、大学での成長の土台を作ることも示唆された。探究学

習に取り組む高校生を、賞や成績、入試で動機づけるのではなく、探究学習に熱心に取り組んだ者ほど大学で成長するというモデルやナラティブを、高校と大学で共有することが重要である。一方、本調査の対象者には探究学習が必修ではなかった世代も含まれており、探究学習の必修経験者が大学で学ぶ場合の知見の有効性には留意すべきである。

さらに加えて言えば、本稿が対象としたKUGS 高大接続プログラム受講生や探究活動経験者の背後には、大学時代に十分に成長を実感できていない者も存在することを忘れてはならない。大学が「学びの転換」を果たした者とそうでない者が互いに交流し刺激し合う場となることが、今後ますます重要である。このような交流やそれに伴う成長実感を実証的に調査することも、今後の重要課題となるだろう。

注

- 1) 荒井は「学校の教育目標を学力の要素に読み替えるというのは筆者の理解をこえるが、さらに、この「学力の三要素」で小学校から高等教育までの学力像を貫くというのは教育制度論からしても論外」（荒井, 2018: 18）と論じる。
- 2) 2023 年度に実施した KUGS 特別入試合格者入学前意識調査の一部は、田中千晶・荻谷千尋「金沢大学における「育成型」の高大接続入試の評価：「KUGS 特別入試」合格者へのアンケート結果から」（大学教育学会, 2023 年）で報告済みである。また、コア・センターは、KUGS 高大接続プログラムを修了し入学した者を対象にインタビュー調査を実施している。2023 年度分の特徴については、荻谷千尋・田中千晶・中野正俊「「育成型」総合型選抜における高大接続の試み：入学者のヒアリング調査から」（大学教育研究フォーラム,

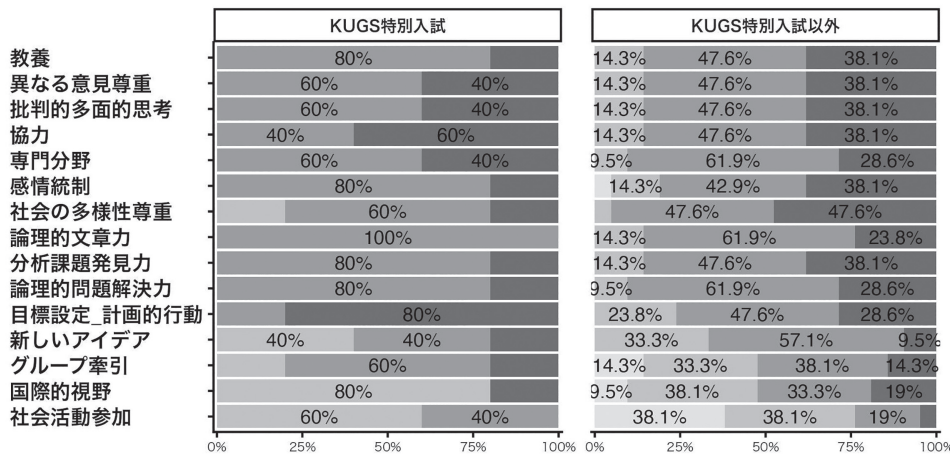


図 5 大学生活を通じた成長実感（入試区分）

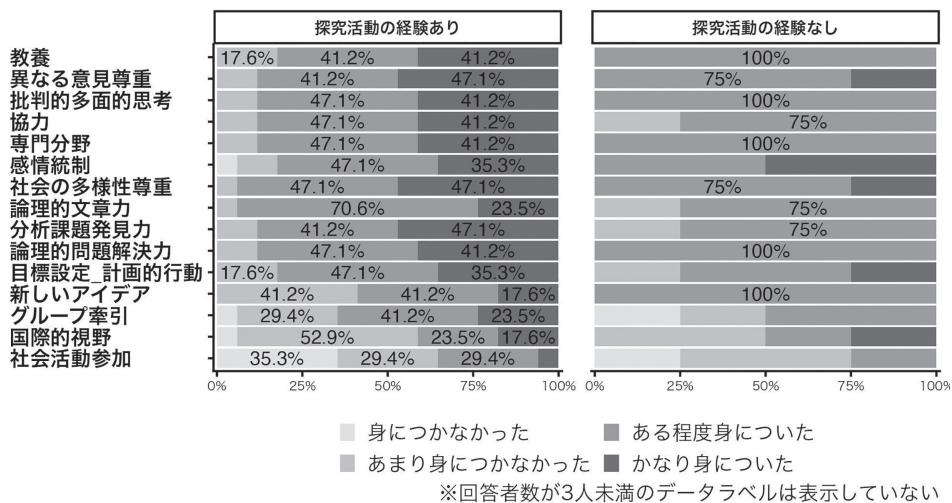


図 6 大学生活を通じた成長実感（探究学習の経験の有無）

2023 年)で報告している。本稿はインタビュー調査に触れないが、ここで紹介する意識調査の調査設計や解釈に用いている。

- 3) KUGS 高大接続プログラムポータルサイト (<https://kugspro.adm.kanazawa-u.ac.jp>) を参照。閲覧日は 2025 年 7 月 25 日。以下同様。
- 4) 大修館書店探究 WEB マガジン「[選別]ではなく「育成」のプログラムを」(<https://www.taishukan.co.jp/tankyu/media/blog/?act=detail&id=325>) を参照。
- 5) 2 種のレポートの「合格」評価で同プログラムの修了認定が得られる。「大学での学び」レポートは 1 年生から受講可能であり、開催形態は 3 種 (Web セミナー, Live セミナー, ラウンドテーブル), プログラム数は 100 以上に及び、多くの専門領域をカバーしている。また複数のプログラムを受講可能である。大学への早期入学及び高等学校・大学間の接続の改善に関する協議会は、大学に、特定分野での卓越した能力を持つ高校生のみならず「専門的な事項について強い意欲や関心を持つ高校生」に「多彩かつ多様な教育に触れる機会を広く提供する」ことを求めるが、本プログラムはこの趣旨に沿う (文部科学省, 2007: 17)。具体的な課題内容は注 3 のリンクを参照。評価基準, 評価結果の概要もここで公表している。
- 6) 回答率は以下の通り。2023 年度調査: 83.6%, 2024 年度調査: 18.4%, 2025 年度調査: 82.4% (母数である, KUGS 高大接続プログラムの修了認定を得て KUGS 特別入試に合格した者の数は非公開としているため, 回答者数, 合格者数は掲載しない)。
- 7) 本データは回答分布が肯定側に偏在しており、「成長を実感する回答」と「成長を実感しない回答」のように二値化すると情報損失が生じることから、上位カテゴリ「強くそう思う」を独立の指標として扱う。続く高大接続意識調査でも同様の傾向が見られる場合は、上位カテゴリを独立の指標とする立場をとる。リッカート尺度におけるカテゴリ操作の考え方については, Tsai et al. (2024) や 西出 (2023) を参照した。
- 8) 高校教諭によるレポートサポートの有無・種類でクロス集計したところ、「添削してもらった」者は「意見をももらった」者やサポートなしの者に比べ、「振り返る力」が身についたと評価する傾向にあるが ($p = .043$ 。ただし 2023 年度調査では有意差なし), その他の成長実感に関する項目では特徴的な違いは見られなかった。レポートの理解度, 難易度においては, 群間に顕著な差がないことを確認している。

参考文献

- Tsai, C.-L. et al. (2024). “Exploring the Effects of Collapsing Rating Scale Categories in Polytomous Item Response Theory Analyses: An Illustration and Simulation Study”, *Measurement: Interdisciplinary Research and Perspectives*, **23**(1), 66–89.
- 荒井克弘 (2018). 「高大接続改革・再考」『名古屋高等教育研究』 **18**, 5–21.
- 井ノ上憲司 et al. (2022). 「多面的・総合的入学者選抜の効果検証：卒業年度の学生・教員双方の追跡調査の分析」『大学入試研究ジャーナル』 **32**, 56–61.
- 遠藤健 (2022). 「入試区分別の在学時の学びとアウトプットの関係：卒業生調査からの検討」『大学入試研究ジャーナル』 **32**, 49–55.
- 中央教育審議会 (2014). 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 大学入学者選抜の一体的改革について」.
- 西出崇 (2023). 「学生アンケートの質問紙における択一式設問の選択肢および回答方法が結果におよぼす影響」『大学情報・機関調査研究集会 論文集』 **12**, 116–121.
- ベネッセ教育総合研究所 (2022). 「第 4 回大学生の学習・生活実態調査報告書 データ集 (2021 年)」
https://benesse.jp/berd/koutou/research/detail_5772.html (2025 年 4 月 20 日).
- 本庄秀明 (2022). 「大学生の学習態度とその規定要因について：全国大学生調査の二次分析の結果から」『大学評価研究』 **21**, 93–101.
- 松下佳代 (2010). 「大学における「学びの転換」とは：unlearn 概念による検討」東北大学高等教育開発推進センター編『大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来』東北大学出版会, 5–15.
- 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室 (2007). 「大学への早期入学及び高等学校・大学間の接続の改善に関する協議会報告書：一人一人の個性を伸ばす教育を目指して」.
- 山田礼子 (2011). 「大学からみた高校との接続：教育接続の課題」『高等教育研究』 **14**, 23–46.